

女子青年の宗教意識 : アンケート調査による

著者	岨中 達
雑誌名	真宗文化 : 真宗文化研究所年報
巻	11
ページ	1-22
発行年	2002-07-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000702/

女子青年の宗教意識

——アンケート調査による——

京都光華女子大学短期大学部

唄 中 達

I. はじめに

われわれは、いま、21世紀を生き始めたばかりである。人々は新世紀についてさまざまな抱負、期待を語る。しかし新世紀、それは明るいばかりのものではない。誰かが言ったように、「歴史上最悪の時期は20世紀で終わった」と後世の人々に言わしめることが出来るのかといえ、我々は、昨年10月、全世界同時にTV画面上に、歴史上最悪最悲惨な地獄の恐怖を体験したばかりである。しかしその体験は、現場で、押し潰され、逃げ惑い、茫然と立ち尽くす人たちとは、同じでありえなかった。地獄はニューヨークだけではない。ついこの間神戸を中心とする地震で、東京の地下鉄でのサリンで、豊中市の教育大付属小学校で我々はそれを体験したばかりであった。

我われは今、どちらへ向かうどのような世界に、どのような生を生きているのであろうか。だが、なにがこの間に答えてくれるのであろうか。自ら答えを得るに値する苦しみと忍耐と探求の行為無くしては、その答えは求め得ないのであろう。

ところで人生における華の季節にたとえられる青年期、この時期も、疾風怒濤の時期とも呼ばれるように、華やぐ明るさばかりの時期ではない。激しい抑鬱と高揚感、失意と得意、自愛と愛他、膨らむ希望と絶望の狭間で、鋭い感受性故に動揺し、翻弄され、自他の心の地獄をのぞき見ることも少なくないのが

青年期であろう。

このような時代と人生の時期を生きる青年にとって、人の生きざま、幸せに関わる宗教は、どのように考えられているのであろうか。青年はどのように宗教に関わろうとしているのであろうか。一部では青年の宗教離れが言われながら、宗教に関わる事件が生じた場合、そこには必ず一群の青年の深い関与があることを見れば、青年はむしろ宗教に対し無関心ではなく、深いところでか絡めのかは別にして、宗教を求めている存在であるとも考えられる。

我が光華女子学園は、「真実心」を校是とし、女子教育における宗教教育を重視している。ところで、教育の対象である学生諸君にとって、宗教とは何であるのか。それに対して学生達はどのような意識をもち、どのように接し、関わっているのか。ここでは、大学、短期大学部に所属する青年期女子の宗教との関わり方、その意識を質問紙法により調査したので報告する。

Ⅱ. 調 査

1. 調査時期

第1回調査：平成13年1月

第2回調査：平成13年12月

2. 調査対象（表1）

光華女子大学生（情報関係の授業の受講生 人間関係学部 66名）

同短期大学部学生（心理学関係の授業の受講生 栄養・食品・生活デザイン・生活情報専攻 239名）

合計 305名

調査学生の調査時別・校種別・学年別・年齢別詳細を示したのが表1である。

表1. 調査学生

年齢 学年	第1回調査		第2回調査			合 計				
	短1	短2	大1	短1	短2	大1	短1	短2	短計	総計
18歳	9		15	19		15	28		28	43
19	60	22	50	33	6	50	93	28	121	171
20以上	2	70			15		2	85	87	87
不明	2		1		1	1	2	1	3	4
計	73	92	66	52	22	66	125	114	239	305

3. 質問紙

資料1として末尾に掲載。調査項目21。

第2次調査で、質問9, 11に、回答項目として「授業」を追加した。

4. 調査方法

該当授業終了時、受講生に調査趣旨を説明し、回答を依頼、質問紙を配布し、その場で記入してもらった。

Ⅲ. 調 査 結 果

大学生と短期大学部生の2校種、さらに短期大学部生についての調査は2つの時期にわたっているが、調査数がそれほど多くないため、最終的には合算集計した。

1. 学園の教育方針について

表2. 問1 受験の時点で、光華が宗教系の学校であることを知っていた

学年 回答	大1		短1		短2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
はい	55	83.3	94	75.2	82	71.9	176	73.6	231	75.7
いいえ	11	16.7	31	24.8	32	28.1	63	26.4	74	24.3
無回答	0		0		0		0		0	
計	66		125		114		239		305	

問1の回答に見られるように、大学生の場合、受験時に83.3%が学園が宗教系であることを知っていた。この数字は短大生の全体の認識度73.6%より9.7%多く、大学生の方が短期大学部生よりも進学志望先の情報に通じていたようである。またこの差は進学志望先へのコミットの仕方の差を表すものでもあろう。

表3. 問2 現在感じている学園の宗教色は、はじめ考えていた程度と比べて

学年 回答	大1		短1		短2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
つよい	35	53.0	33	26.4	27	23.7	60	25.1	95	31.1
同程度	23	34.8	68	54.4	62	54.4	130	54.4	153	50.2
よわい	8	12.1	24	19.2	25	21.9	49	20.5	57	18.7
無回答	0		0		0		0		0	
計	66		125		114		239		305	

現在、光華女子学園で学生生活を送っていて、日常感じる学園の宗教色を、学生たちはどう感じているのであろうか(問2)。大学生では思っていたのよりも強いと感じている学生が53%と半数を超えているのに、短期大学部生ではその半分以下の25%いるにすぎない。逆に宗教色は思っていたよりも少ないと感じている学生は、大学生の12.1%、短期大学部生の20.5%である。

このような学園の宗教色に対して、肯定的か否定的かを尋ねたのが、問3である。

表4. 問3 学園の宗教色に抵抗がありますか

学年 回答	大1		短1		短2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
つよい	23	34.8	7	5.6	8	7.0	15	6.3	38	12.5
あまりない	38	57.6	90	72.0	79	69.3	169	70.7	207	67.9
ない	5	7.6	28	22.4	26	22.8	54	22.6	59	19.3
無回答	0		0		1	0.9	1	0.4	1	0.3
計	66		125		114		239		305	

学園の宗教色については、大学生、短期大学部生間でその態度に大きな差がある。短期大学部生では、抵抗があまりない・ないとするものが93.3%とほとんどを占めるが、大学生では65.2%と、過半数は占めるものの、強い抵抗感を感じるというものが、34.8%と全体の1/3を超えて多い。

問1、2、3を通して学園の宗教的色彩に対する学生の態度を見るなら、大学生は短期大学部生にくらべて、入学前より学園の宗教性について知識を持つ者が多かったが、入学後の学生生活では、学校についての知識が少ない学生が多かった短期大学部生の方が、大学生よりそれに屈託することのない学生生活を送っているといえよう。

2. 我が家の宗教

ここでは、宗教的生活の基本的知識であり、家族の宗教生活に必要な常識でもあると考えられる、我が家が所属する宗教教団、その宗派、その祭祀について質問している。

まず、我が家の宗教が、何教（仏教？神道？キリスト教？？）かを聞いたが（問4）、知っている者は、どの集団でも76%を超えることはなかった。大学の情報に強いものが多い大学生（83.3%）より、弱かった短期大学部生（73.6%）の方に、社会的常識である自家の宗教を知っている者が多かった。

表5. 問4 私の家の宗教は何教か知っている

学年 回答	大1		短1		短2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
はい	46	69.7	92	73.6	86	75.4	178	74.5	224	73.4
いいえ	19	28.8	32	25.6	28	24.6	60	25.1	79	25.9
無回答	1	1.5	1	0.8	0		1	0.4	2	0.7
計	66		125		114		239		305	

表6. 問5 私の家の宗教の宗派を知っている

学年 回答	大1		短1		短2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
はい	17	37.0	51	55.4	59	68.6	110	61.8	127	56.7
いいえ	27	58.7	40	43.5	27	31.4	67	37.6	94	42.0
無回答	2	4.3	1	1.1	0		1	0.6	3	1.3
計	46		92		86		178		224	

自家の宗教が何教であるか知っていた者について、さらにどの宗派に属するのかを聞いてみると(問5)、知っているものは、短期大学部生に多く、その61.8%が知っていたが、大学生では知る者は37%に過ぎず、前問の場合と同じ傾向が見られた。

問6で、家で神仏を祭っているかどうかを聞いたが、祭っている(神棚、仏壇またはそれに類するものがあると考えられる)と答えたものは、どのグループにも50%以上おり、グループ間の差は少ない(最低大学1年生53%)。短期大学部生のなかでは自家の宗教、宗派を知っている者が少なかった1年生の家庭で、いちばん多く(60%)神仏の祭祀が行なわれている。最近になるほど、青年たちの自家の宗教行事、宗教行為への関心・参加度が低下してきているのだろうか。なお読売新聞の2001年12月の調査(2)では、家に神仏を祭る場所があるかとの間に「ある」と答えたものの全国平均は77.6%であった。

表7. 問6 私の家では神仏を祭っている

学年 回答	大1		短1		短2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
はい	35	53.0	75	60.0	65	57.0	140	58.6	175	57.4
いいえ	31	47.0	50	40.0	49	43.0	99	41.4	130	42.6
無回答	0		0		0		0		0	
計	66		125		114		239		305	

3. 青年の日常における宗教との関わり

ほとんどすべての人々にとって受け入れられる宗教的行事で、参加し得る宗教的行為といえ、お正月の初詣であろう。問7の回答で見ると、全体では7割が初詣をしているが、1年生と2年生ではかなりの差が見られる。すなわち

表8. 問7 このお正月に初詣をした

学年 回答	大1		短1		短2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
神社	43	65.2	82	65.6	87	76.3	169	70.7	212	69.5
仏閣	1	1.5	6	4.8	5	4.4	11	4.6	12	3.9
しなかった	22	33.3	39	31.2	25	21.9	64	26.8	86	28.2
無回答	0		0		0		0		0	
学生数	66		125		114		239		305	

神仏・仏閣両方に行っている者がいる。

大学生、短期大学部生とも1年生は初詣したものが65%台であるのに、短期大学部生のみではあるが2年生では76.3%がお参りしている。1年生の場合、なお受験生生活で、初詣の時間的余裕、心理的余裕もなかったのか、それと初詣での習慣そのものが、年々衰えていきつつあるのだろうか。参詣先はほとんどすべて神社であって、仏閣との重複参詣あるいは仏閣のみへの参詣はきわめて少ない。初詣は、わが国に居住するもっとも多くの人々が参加する宗教行事であるが、これも、たんに神道の宗教的雰囲気を持ったお正月の風景への埋没的参加に過ぎなくなりつつあるものであろうか。ちなみに読売の調査では、70.0%が初詣にいくと答えている。

4. 信仰心

宗教意識に関わる中心の問題である信仰心、「現在の信仰の有無」を尋ねてみる(問8)と、学年グループにより少々の多少はあるが全体で10.5%(8.0~14.0%)が「ある」、89.2%(86.0~91.2%)が「ない」と答えている。読売調査の全国平均では「信じている」は21.5%、「ない」は77.3%であるから

本学の調査学生の有信仰率はそのほぼ半分ということになるが、石井(1)によれば「宗教と社会」学会の大学生を対象とする調査(1996)では、現在「信仰あり」は7.6%しかなかったから、本学学生ではほぼその1.1～1.8倍になる。

表9. 問8 私には現在信仰している宗教がある

学年 回答	大1		短1		短2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
はい	6	9.1	10	8.0	16	14.0	26	10.9	32	10.5
いいえ	60	90.9	114	91.2	98	86.0	212	88.7	272	89.2
無回答	0		1	0.8	0		1	0.4	1	0.3
計	66		125		114		239		305	

では、現在信仰を有する学生に、信仰をもつように影響した契機は何であったのか(問9)。

信仰を有する学生の84.4%が「家族」の影響と答え、ついで自己の「個人的体験」21.9%(内容は不明)を挙げている。以下「友人」「その他」「授業」と続くが、「授業」がどの学校段階でのものかは、不明である。

表10. 問9 私が信仰を持つのに影響したのは

学年 回答・・・から	大1		短1		短2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
家族	4	66.7	8	80.0	15	93.8	23	88.5	27	84.4
友人					1	6.3	1	3.8	1	3.1
個人的体験	2	33.3	2	20.0	3	18.8	5	19.2	7	21.9
授業	1	16.6							1	3.1
その他			2	20.0	2	12.5	4	15.4	4	12.5
無記入	0		0		0		0		0	
有信仰者	6		10		16		26		32	

複数回答がある。

信仰まではいかないが、宗教には関心を持っているというもの(問10)は全体で9.2%であるが、グループ間の有関心率の差は有信仰率の場合より大きい

ようである(3.3~13.9%)。

上記、信仰はしていないが、宗教に関心を持っていると答えた人たちが、それは何に影響を受けてのことかについて答えているのが(問11)に見られる結果であるが、信仰している人たちの場合と同じく、「家族」の影響(48.0%)

表11. 問10 私は信仰はしていないが宗教や信仰に関心をもっている

学年 回答	大 1		短 1		短 2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
はい	2	3.3	16	13.9	7	7.1	23	10.8	25	9.2
いいえ	58	96.7	95	82.6	88	89.8	183	85.9	241	88.3
無回答	0		4	3.5	3	3.1	7	3.3	7	2.6
計	60		115		98		213		273	

を挙げる人がもっとも多い。これに、「個人的体験」(32.8%),「その他」(20.0%),「授業」(12.0%)と続いている。「授業の影響」は短期大学部1年生のみに認められる回答であり、短大入学後の授業を指すと考えてもよからう。

表12. 問11 私は信仰はしていないが、宗教に関心を持つのに影響したのは

学年 回答・から	大 1		短 1		短 2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
家族	1	50.0	7	43.8	4	57.1	11	47.8	12	48.0
友人					1	14.3	1	4.3	1	4.0
個人的体験	1	50.0	4	25.0	3	42.9	7	30.4	8	32.0
授業			3	18.8			3	13.0	3	12.0
その他			3	18.8	2	28.6	5	21.7	5	20.0
無記入	0		0		0		0		0	
有関心者	2		16		7		23		25	

人の死とその靈魂の存否(問12)については、死後の靈魂の存在を肯定するものは全体で38.7%(30.3~45.6%), 否定は1割前後で「わからない」とする者が、約半数を前後する。

表13. 問12 死後も人の靈魂は存在しつづけると思う

学年 回答	大 1		短 1		短 2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
はい	20	30.3	57	45.6	41	36.0	98	41.0	118	38.7
いいえ	6	9.1	10	8.0	12	10.5	22	9.2	28	9.2
わからない	40	60.6	58	46.4	61	53.5	119	49.8	159	52.1
無回答	0		0		0		0		0	
計	66		125		114		239		305	

神仏の存在については(問13)、肯定者は短期大学部1年生にもっとも多く(40.0%), もっとも少ないのは大学生(27.3%)である。この傾向は、非信仰者の宗教への関心、靈魂の存在についても認められた傾向であり、自家での神仏の祭祀(問6)、すなわち育ってきた家庭の日常的な宗教的雰囲気と関連するといえよう。なお、神仏の存在についての読売調査の結果は、「存在する」39.9%, 「何とも言えない」30.6%, 「存在しない」28.4%であった。

表14. 問13 神や仏は実存すると思う

学年 回答	大 1		短 1		短 2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
はい	18	27.3	50	40.0	35	30.7	85	35.6	103	33.8
いいえ	13	19.7	22	17.6	22	19.3	44	18.4	57	18.7
わからない	35	53.0	53	42.4	57	50.0	110	46.0	145	47.5
無回答	0		0		0		0		0	
計	66		125		114		239		305	

神仏の存在を肯定するなら、神仏と行動をともし、その加護を期待することが出来る「お守り」を身につけるという行動は、読売調査では、31.2%にみられたが、学生ではお守り所持率は、その2倍を前後していた。すなわち、皮肉にも神の实在肯定者がいちばん少なかった(27.3%)大学1年生グループが所持率は最多で75.8%, 实在肯定率が最高(40.0%)の短期大学部1年生グループの所持率が最低(69.6%)であった。

表15. 問14 私は(神社の お寺の その他の) お守りをもっている

学年 回答	大 1		短 1		短 2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
はい	50	75.8	87	69.6	84	73.6	171	71.5	221	72.5
いいえ	16	24.2	37	29.6	30	26.3	67	28.0	83	27.2
無回答	0		1	0.8	0		1	0.4	1	0.3
計	66		125		114		239		305	

お守りの効果(問15)については肯定(22.7%), 否定(28.8%)ともに最多は大学1年生で, 両者最小は短大1年生の肯定16.0%, 否定16.8%で, 5割前後(48.5~64.5%)が少しだけ安心できると, 消極的な肯定意見を述べている。大学1年生は, 信仰に関する諸問に対して, 他より肯定的回答が少なく, 否定回答が多いグループでもあるが, 「わからない」と回答を保留する者も最多のグループなのである。

表16. 問15 お守りをもっていると安心できる

学年 回答	大 1		短 1		短 2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
はい	15	22.7	20	16.0	25	21.9	45	18.8	60	19.7
少しだけ	32	48.5	80	64.0	62	54.4	142	59.4	174	57.0
いいえ	19	28.8	21	16.8	25	21.9	46	19.2	65	21.3
無回答	0		4	3.2	2	1.8	6	2.5	6	2.0
計	66		125		114		239		305	

表17. 問16 宗教は私たちの生活に必要なものだと思う

学年 回答	大 1		短 1		短 2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
はい	9	13.6	26	20.8	20	17.5	46	19.2	55	18.0
わからない	48	72.7	84	67.2	78	68.4	162	67.8	210	68.9
いいえ	8	12.1	15	12.0	16	14.0	31	13.0	39	12.8
無回答	1	1.5	0		0		0		1	0.3
計	66		125		114		239		305	

読売調査で「現在、あなたが幸せな生活を送るうえで、宗教は大切であると思いますか、そうは思いませんか」という質問に対する回答は、「大切である33.6%」、「そうは思わない61.7%」であった。この質問と質を同じくする本調査の「宗教は私達の生活に必要なものだと思う」という意見(問16)についての回答は、選択肢に「わからない(67.2~72.7%)」があるとはいえ肯定回答は18.0%(13.6~20.8%)と読売調査と比較して半分に近く少なかった。

宗教の必要性を肯定する回答は学年グループによって少々差があるが、否定的意見は12.0%~14.0%と学年グループ間にほとんど差がない。

問16で宗教の必要性を肯定した55名にその理由を聞いたのが問17である。

それによると、肯定的意見では、宗教は祖先崇敬のために必要(70.9%)とするものが最多で以下、選択肢のなかでは心の安定のため(65.5%)、不安・迷いからの脱出(32.7%)世界を平和にする(25.5%)と続き、現世利益のため(14.5%)がもっとも少ない。自由記述には、大学1年生：すがりつきたいときもあると思うから。存在する人は信用できないから。宗教は人生の目的・目標である。短期大学部1年生：宗教の話を聞くと元気になれたり、ためになるから。人間が人間であるために必要である。自分の向上のため。短大2年生：日本の文化を語り継ぐため。宗教にすがりつかないと生きてゆけない人もいる。生きているのでなく生かされていることを自覚する。どの宗教も感動するのなら必要という意見があった。

表18. 問17 宗教が私たちの生活に必要なだと思う理由

回答 理由	はい		いいえ		わからない		無記入	
	N	%	N	%	N	%	N	%
①心の安定	36	65.5	5	9.1	8	14.5	6	10.9
②現世利益	8	14.5	19	34.5	18	32.7	10	18.2
③世界を平和に	14	25.5	14	25.5	16	29.1	11	20.0
④祖先崇敬	39	70.9	6	10.9	3	5.5	7	12.7
⑤不安迷い脱出	18	32.7	13	23.6	12	21.8	12	21.8
	55名							

否定意見がもっとも多かったのは現世利益（34.5%）についてであり、「宗教には世界を平和にする力がある」は、賛否同数の25.5%であった。心の安定のため、祖先崇敬のために対する否定的意見はそれぞれ9.1%、10.9%と少なかった。「わからない」と判断を保留する者がもっとも多かったのは、否定的意見が最多であった「商売繁盛等の現世利益をうるため」32.7%で、「宗教には世界を平和にする力がある」も肯定、否定回答を超えて、29.1%の判断保留者がいた。また、判断保留最少項目は、当然のことながら肯定意見がもっとも多かった「先祖を敬うため」で、5.5%であった。

宗教については、「宗教は若者には関係のない、死を前にした老人のもの」「宗教は死のための儀礼である」と見るような意見が罷り通っていることも否定できないのが現実である。そこで、60歳になった自分を想像してもらったのが問19で、年をとれば、宗教と親和的になるだろうとの考えが一般的ではないかと考えての設問である。

問8の現在信仰している人の数と比較すると、全体では、信仰者は32名から44名へと、約1.4倍に増加しているが、短期大学部2年生グループでは、どうしたことか現在の16名から13名へと減少している。それにしても、大学1年生では信仰者は、6名から10名へ（1.67倍）、短大部1年生では10名から21名へと2.1倍の増加である。自己の加齢による宗教への親和の予感はあるのであろう。はっきりと否定的意見を述べるものは全体で25.6%（29.8～21.2%）であった。

表19. 問19 60歳になったときの私はきっと宗教を信仰していると思う

学年 回答	大1		短1		短2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
はい	10	15.2	21	16.8	13	11.4	34	14.2	44	14.4
わからない	42	63.6	74	59.2	67	58.8	141	59.0	183	60.0
いいえ	14	21.2	30	24.0	34	29.8	64	26.8	78	25.6
無回答	0		0		0		0		0	
計	66		125		114		239		305	

宗教の必要性を問うた問17では、祖先崇敬のためという理由が最も多かった(70.9%)が、「自分の先祖は子孫を守ってくれと思うか」という設問問20では、大学1年生以外が、「そう思う」(短大部1年生53.6%、同2年生50.0%)と、「わからない」を上回る回答をした。これは神仏の存在を肯定する数値(問13, 27.3~40.0%)をはるかに上回る。ここでは老いも若きも我々の多くがもつ、きわめて素朴な宗教意識に出会ったのである。否定する者は1割をこえなかった(4.0~6.3%)

表20. 問20 私の先祖は私たち子孫を守ってくれていると思う

学年 回答	大 1		短 1		短 2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
はい	30	45.5	67	53.6	57	50.0	124	51.9	154	50.5
わからない	32	48.5	53	42.4	47	41.2	100	41.8	132	43.2
いいえ	4	6.1	5	4.0	10	8.8	15	6.3	19	6.2
無回答	0		0		0		0		0	
計	66		125		114		239		305	

問19(60歳になったとき…)は将来について尋ねた質問であるが、いまひとつ宗教の未来について意見を求めたのが問21である。

今日、科学は真理の探求、法則解明の道を驍進しているかに見える。科学者は「やがて科学はすべてを解明し尽くすであろう」と予言する。その日が来るかどうかは別にして、科学が進歩すれば、宗教はその役割を科学に譲り渡して

表21. 問21 科学が進めば、宗教は力を失っていくと思う

学年 回答	大 1		短 1		短 2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
はい	7	10.6	12	9.6	15	13.2	27	11.3	34	11.1
わからない	40	60.6	72	57.6	57	50.0	129	54.0	169	55.4
いいえ	19	28.8	41	32.8	42	36.8	83	34.7	102	33.4
無回答	0		0		0		0		0	
計	66		125		114		239		305	

いくのであろうか。宗教はその力を失っていくのであろうか。この問題についての意見を聴いたのが問21である。

回答としては「わからない」が55.4% (50.0～60.6%)と過半数を超え、判断を躊躇する人が多いが、宗教はその力を失い、その役割を終わるであろうという判断は、1割強の11.1% (9.6～13.2%)に過ぎない。従って、宗教は力を失うことなく、その役割を果たし続けるであろうという「いいえ」が全体で1/3, 33.4% (28.8～36.8%)みられる。

ところで、今日、街では宗教の名のもとに行なわれているさまざまな積極的・消極的活動を目にする。それらは、純粋な宗教活動や福祉活動だけではなくて、政治活動であったり、宗教とは名ばかりの経済・商業活動、集人・勧誘活動であったりすることもまれではない。時には後で新聞紙上で騒がれる非合法活動であることさえある。それが集団で、関係者個人でなされたりする。それは日常的で、我々の側近くでも、堂々とあるいは少々人目を気にしながら行なわれている。学生諸君が接触する機会も少なくない(6)。そこで、これまでに、宗教関係者から、なんらかの勧誘を受けたことがあるかどうかを聞いてみた。「はい」が55.1% (50.0～59.2%)で、過半数の学生が、なんらかの勧誘を受けた事があると答えている。2年生 (50.0%)より1年生 (大56.1%, 短59.2%)にわずかではあるが多いことから、勧誘活動は最近激化の傾向にあるのかもしれない。

表22. 問18 これまでになんらかの宗教関係者から勧誘を受けたことがある

学年 回答	大1		短1		短2		短計		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
はい	37	56.1	74	59.2	57	50.0	131	54.8	168	55.1
いいえ	29	43.9	51	40.8	57	50.0	108	45.2	137	44.9
無回答	0		0		0		0		0	
計	66		125		114		239		305	

5. 宗教の色イメージ（付録2参照）(4), (5)

当然ながら複雑な属性をもつ抽象概念を一言で語り尽くすことは出来ない。しかし、もし適切な比喩を用いて語るなら、その詳細を語ることなく、わが胸にあるものを他人と共有することが出来よう。そこで問22, 23, 24, 25ではそれぞれ「宗教」、「仏教」、「キリスト教」、「神道」を色に例えて表現するように求めた。人によって観点に違いもあるであろうが、選ばれたそれぞれの「色」はその人にとっての「宗教」「仏教」…を代表するものであり、その色のもつ意味を通して何が意味されているかに近付くのである。

(1)宗教（問22）

305名によって選ばれた色名は26種にも上るが、もっとも多くの人に選ばれたのは白（59人，19.3％）で、以下「灰」「茶」「黒」「紫」が上位5位を占め、これだけが全員中64.6％によって選ばれている。

「白」は神聖，清浄，潔白，信仰，歓喜を意味するといわれ、「灰」は過去の苦悩を，「茶」は大地の色，命をつなぐ色，「黒」は厳粛，静寂，悲哀を意味し，「紫」は神秘，永遠，温厚などと共に不安を意味するという。これらの意味の統合に他に選ばれたさまざまな色の意味するところを加えるなら，305名の女子学生にとり，宗教が何であるのかの理解に近付けよう。

表23. 宗教の色イメージ（問22, 23, 24, 25より，上位5位まで $\Sigma N=305$ ）

順位	宗教			仏教			キリスト教			神道		
	色	N	%	色	N	%	色	N	%	色	N	%
1	白	59	19.3	茶	83	27.2	白	109	35.7	白	73	23.9
2	灰	44	14.4	金	71	23.3	黄	69	22.6	金	38	12.5
3	茶	39	12.8	黒	35	11.5	金	42	13.8	黄	38	12.5
4	黒	28	9.2	紫	31	10.2	赤	25	8.2	赤	31	10.2
5	紫	27	8.9	灰	13	4.3	銀	13	4.3	黒	23	7.5
	他	108	35.4	他	72	23.5	他	47	15.4	他	102	33.4

(2)仏教（問23）

「仏教」で上位5位内に選ばれたのは，「茶」（83名，27.2％）「金」（71名，

23.3%) の 2 色が特に多く、以下は「黒」(35名, 11.5%)、「紫」(31名, 10.2%)「灰」(13名, 4.3%)で、この5色の選択者で76.5%を占める。宗教と比べると、5色中4色が共通で、回答者の認識には共通する部分が多いようである。すなわち今回の回答者では、「宗教」という言葉でまずイメージされるのは「他教」ではなく「仏教」であったということである。なお一方にしか入らなかった金と白では、宗教の、「金」は6位(8.2%)であったが、仏教の「白」は8位(2.6%)に過ぎなかった。「茶」、「金」の選択多数と共に、「白」の選択の少なさが、仏教と宗教のイメージの違いにみられる特徴である。

(3)キリスト教(問24)

調査対象者の1/3以上から選択された「白」が、もっとも多く(109人, 35.7%),「黄」(69名, 22.6%),「金」(42名, 13.8%),「赤」(25名, 8.2%),「銀」(13名, 4.3%)で、全体の84.5%を占め上位5位をなしている。このうち「黄」「赤」「銀」の3色が、前2問では、上位5位内には見られなかった色である。

光と田の含意文字だといわれる「黄」は、明るい、柔らかな、活動的な、といった生命力と共に、涅槃の色、死に向かうイメージの色だと言われ、赤は、十字架上にながれたイエスの血を連想させる色であり、また、昇る朝日の色、還暦を祝う色であるように死と再生を連想させる色だといわれる。また「銀」は月を連想させ、悪霊や魔術を防ぐお守りでもあった。

(4)神道

「神道」では、「白」(73名, 23.9%),「金」(38名, 12.5%),「黄」(38名, 12.5%),「赤」(31名, 10.2%),「黒」(23名, 7.5%)が上位5位の色で、これらの5色で全体の66.6%を占めるが、色選択は、4問の内「宗教」について分散している。

神道で選択された色を、他問の色と比較すると、「宗教」とは、上位5色中共通するのは、「白」「黒」の2色、「仏教」とは「金」「黒」の2色、キリスト教とは、「白」「金」「黄」「赤」の4色と多い。神道も宗教の場合とほぼ同じく、上位5位までに入る回答者は66.6%で、それほど多くはなく、少数の色に集中

するキリスト教とは異なるが、選択される色、持たれるイメージから言えば、多神教・一神教の違いは大きい、罰を下すことのある「神道」のイメージは、罪を許し抱擁する仏教のそれより、「神」なる共有語を持ち審判を下す「キリスト教」に似ているようである。

Ⅳ. おわりに

本調査は、青年期女子が日常どのような宗教との関わり体験を持ち、それを通していかなる宗教意識を構成しているかを管見しようとするものであった。調査に協力してくれたのは京都光華女子大学生（人間関係学部1年）、ならびに同短期大学部生（全専攻1年、2年）のみであり、層化無作為抽出、結果の差の検定等の統計的処理はしていない。それ故、方法論的不備、結果の不分明の指摘は甘受する。しかし、宗教教育を標榜する本学園にあって、これまで持たなかった大学生、短期学部生の日常生活における宗教との関わりの実態、彼女たちに内在する宗教意識を理解するに必要な資料の一端を、ささやかながら得ることが出来た。

調査に協力回答してくれた学生の4分の1強が自家の宗教が何教であるかを知らず、9割弱が、現在信仰している宗教はないと言い、43%弱が生家では神仏を祭っていないと回答している。しかし、その一方で、彼女等の5割強が自分たちの先祖は子孫を守ってくれていると考え（否定は6.2%）、7割強がお正月には神社仏閣に初詣し、73%弱が社寺のお守りを持っていて、多少とも安心を得ているという。

一見無神論者が多いかに見える彼女たちではあるが、それは宗教あるいは宗教的なものへの、積極的選択的な「関心が無い」（問8、問10信仰もしていないし関心もない：305名中241名、79.0%）ということであり、神仏の存在を否定しているのは19%弱（問13）である。この否定者も個々に回答を検討していくと、正月には初詣をしていたり、お守りを持っていたり、先祖は子孫を守ってくれと考えていたりする。新々人類などの言葉もあるが、このような諸点をかいま見せる彼女達も、山折(3)の言うように「ソフトな無神論者」であり、

古い先祖からの、「あいまいなままに主体滅却の精神的風土に生きる遺伝子」を見事に受け継いでいる日本人そのものといえるのではなからうか。「知」上位の社会的風潮にあって、彼女等は、「感じ」でものを言うことに劣等感を持っており、一見整合的な論理で迫られるとき、容易に相手の軍門に下ってしまいかねない。相手はその後自門につなぎ止めるためには「情」を利用する。宗教への関心が授業によって喚起されたという回答もあるように、正しい宗教教育が必要なゆえんである。

本研究は平成12年度の光華女子大学真宗文化研究所研究員として研究費補助を受けて行なったものである。研究の機会を与えられた研究所に感謝する。また、アンケートへの回答に協力してくれた学生諸君、ならびに調査実施にご協力くださった人間関係学部酒井先生にお礼を申し上げる。

参考・引用文献

調査紙作成のため参考にした文献

(1)石井研士 1998 データブック 現在日本人の宗教, 新曜社

論文作成のため、参考・引用した文献

(2)読売新聞世論調査部 2001 宗教観全国世論調査(12.28朝刊)

(3)山折哲雄 1996 近代日本人の宗教意識, 岩波書店

(4)香川勇 長谷川望 1997

こどもの絵が訴えるものとその意識, 黎明書房

(5)小林尚美 1997 色の事典, 西東社

(6)小田 晋 2000 なぜ、人は宗教にすがりたくなるのか 三笠書房

(7)中西直樹 2000 日本近代の仏教女子教育, 法蔵館

(8)西田公昭 1998 「信じるころ」の科学, サイエンス社

付録 1

宗教をどう思う？

専攻を○で囲む

栄養 食物 デザイン 文化 情報 英文 国文 人間 学年 年齢 歳

光華は教育方針のひとつの柱として親鸞の教えを掲げている学園です。貴女は宗教をどのようにお考えでしょうか。皆さんのお考えをお聞きし、皆さんの後輩たちの教育に生かしたいと思います。ご協力をお願いいたします。()内および回答欄のそう思う言葉を○で囲み、またそう思う言葉を()内に記入してください。

(調査責任者 短期大学部 嶋中 達)

質 問	回 答
1. 受験の時点で、光華が宗教系の学園であることを知っていた	(はい いいえ)
2. 現在感じている学園の宗教色は、はじめ考えていた程度と比べて	(つよい 同程度 よわい)
3. 学園の宗教色に抵抗がありますか(その程度は?)	(つよい あまりない ない)
4. 私の家の宗教は何教(仏教・神道・キリスト教・その他など)か知っている	(はい いいえ)
5. (知っている方)その宗教の宗派(浄土真宗とかプロテスタントとか)を知っている	(はい いいえ)
6. 私の家では神仏を祭っている	(はい いいえ)
7. このお正月に初詣をした	(神社 仏閣 しなかった)
8. 私には現在信仰している宗教がある	(はい いいえ)
9. (信仰している人)信仰するようになったのは(家族 友人 個人的体験 授業その他)の影響	
10. 私は信仰はしていないが宗教や信仰に関心を持っている	(はい いいえ)
11. (関心のある人)関心を持つようになったのは(家族 友人 個人的体験 授業その他)の影響	
12. 死後も人の靈魂は存在しつづけると思う	(はい いいえ わからない)
13. 神や仏は実在すると思う	(はい いいえ わからない)
14. 私は(神社の お寺の その他の)お守りを持っている	(はい いいえ)
15. お守りを持っていると安心できる	(はい 少しだけ いいえ)

16. 宗教は私たちの生活に必要なものだと思う (はい わからない いいえ)
17. (必要だと思う人) それはなぜですか ()
- ①心の安定が得られる (はい わからない いいえ)
- ②信仰すれば商売繁盛交通安全など色々な願い
がかなう (はい わからない いいえ)
- ③宗教には世界を平和にする力がある (はい わからない いいえ)
- ④先祖を敬うため (はい わからない いいえ)
- ⑤死への不安など色々な迷いから抜け出すため (はい わからない いいえ)
- ⑥その他(自由記述:)
18. これまでになんらかの宗教関係者から勧誘を受けたことがありますか (はい いいえ)
19. 60歳になったときの私はきっと宗教を信仰していると思う (はい わからない いいえ)
20. 私の祖先は私たち子孫を守ってくれていると思う (はい わからない いいえ)
21. 科学が進めば、宗教は力を失っていくと思う (はい わからない いいえ)
22. 宗教をもし色でたとえるなら何色がふさわしいと思いますか () 色
23. 仏教をもし色で表すなら何色がふさわしいと思いますか () 色
24. キリシト教をもし色で表すなら何色がふさわしいと思いますか () 色
25. 神道をもし色で表すなら何色がふさわしいと思いますか () 色

以上です。ご協力ありがとうございました。

付録 2

問22,23,24,25 ○○を色で表すなら何色がふさわしい？

宗教 色	宗教			仏教			キリスト教			神道		
	1回	2回	計	1回	2回	計	1回	2回	計	1回	2回	計
白	36	23	59	6	2	8	57	52	109	40	33	73
黒	12	16	28	16	19	35	2	2	4	13	10	23
灰	26	18	44	5	8	13	1	1	2	4	4	8
金	14	11	25	50	21	71	22	20	42	14	24	38
紫	17	10	27	23	8	31	1		1	1		1
茶	15	24	39	35	48	83	2		2	9	5	14
黄	9	6	15	9	2	11	34	35	69	20	18	38
赤	6	4	10	5	5	10	19	6	25	17	14	31
水	6	1	7		1	1	6	6	12	4	2	6
銀	2		2	4	1	5	5	8	13	4	2	6
緑	4	3	7	1	4	5	4	2	6	9	6	15
紺	2	2	4		1	1				2	2	4
桃		2	2		2	2	4		4	2	4	6
オレンジ	2	2	4		1	1				2	1	3
山吹										1		1
からし							1		1			
黄土	1	1	2	2		2		1	1	1		1
クリーム	2	1	3	1		1				1		1
ベージュ	1		1				1		1			
青	4	4	8	3	5	8	6	4	10	8	4	12
朱								1	1	5		5
紅		1	1		1	1						
銅	1	2	3	3	2	5						
こげちゃ				1		1						
ワイン		1	1									
えんじ		1	1		1	1						
肌		1	1		1	1						
藍					1	1						
Xマス								1	1			
虹	1	1	2		1	1						
光										1		1
混沌	1		1									
無色	2		2							1		1
無記入	1	5	6	1	5	6		1	1	6	11	17

調査第1回 165名, 第2回 140名 計 305名